

新型コロナウイルス感染症対策のための臨時休校が 教師に与える影響

—教職大学院修了生へのアンケートから—

司城紀代美・尾崎 承子・田村 岳充・小野瀬善行・和井内良樹

宇都宮大学共同教育学部教育実践紀要 第8号 別刷

2021年8月31日

新型コロナウイルス感染症対策のための臨時休校が 教師に与える影響[†]

—教職大学院修了生へのアンケートから—

司城紀代美*・尾崎 承子*・田村 岳充*・小野瀬善行*・和井内良樹*
宇都宮大学大学院教育学研究科*

2020年3月から新型コロナウイルス感染症対策のため、全国の学校で臨時休業が始まった。休校期間中、学校の教員はどのようなことを考えていたのだろうか。宇都宮大学大学院教育学研究科教育実践高度化専攻（教職大学院）では、修了生を対象にメールによるアンケートを実施した。本稿ではその中から、「休校期間中に取り組んだこと」「休校期間中に感じたこと、考えたこと」「休校および新しい生活様式による学校再開において生かされた教職大学院での学び」に対する回答について取り上げ、分析結果をまとめた。

キーワード：新型コロナウイルス感染症対策 臨時休校 教職大学院での教師の学び

1. 問題の所在

2020年2月、文部科学省より「新型コロナウイルス感染症対策のための小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校等における一斉臨時休業について」の通知が出され、3月から全国の学校で臨時休業が始まった。休校の期間は地域によって様々であったが、およそ2～3か月に及んだ。この間、学校の教員がどのようなことを考えていたのだろうか。宇都宮大学大学院教育学研究科教育実践高度化専攻（教職大学院）では、2020年6月に、修了生を対象にメールによるアンケートを実施した。本稿ではその中から、「休校期間中に取り組んだこと」「休校期間中に感じたこと、考えたこと」「休校および新しい生活様式による学校再開において生かされた教職大学院での学び」に對

する回答について取り上げ、分析結果をまとめる。なお、回答数は34（教員25、行政職員9）であった。

2. 休校期間中に取り組んだこと

まず、教員の回答を「休校中の児童生徒への対応」「学校再開に向けた取組」「研修・その他」に分類し、Table 1、Table 2、Table 3に示す。

Table 1 休校中の児童生徒への対応

回 答	記述数
課題作成・添削	13
動画作成・配信	10
家庭訪問	10
分散登校	3
電話での連絡	2
メールでの連絡	2
子どもの預かり	2

Table 2 学校再開に向けた取組

回 答	記述数
年間計画等の再編成	9
環境整備等	6

Table 3 研修・その他

回 答	記述数
教材研究・開発	16
自己研修	8
オンラインに関する研修	5
教員への支援	3
その他	5

[†] Kiyomi SHIJO*, Tsugiko OZAKI*, Takamitsu TAMURA*, Yoshiyuki ONOSE* and Yoshiki WAINAI*: The impact of temporary school closures on teachers taking measures to combat the new coronavirus infections: From a questionnaire to graduates of the graduate school of teacher education

Keywords: Taking measures to combat the new coronavirus infections, Temporary school closures, Teacher's leaning in the graduate school of teacher education

* Graduate School of Education, Utsunomiya University
(連絡先: shijo@cc.utsunomiya-u.ac.jp)

Table 1から、休校中の「学びの保障」のために、課題を提供したり、オンライン授業を実施したりしていたことが分かる。また、家庭訪問を実施している学校が多いことも興味深い。コロナ禍ではあっても感染症対策をした上で家庭訪問をした目的として、「児童生徒の様子の把握」「休校による児童生徒の不安の軽減」「教員との関係構築」等が考えられる。これらの結果から、「オンライン等の活用」と「対面によるコミュニケーション」双方のよさを活かし、休校中も教員は児童生徒に対し教育活動を行っていたといえる。教育活動と並行して取り組まれていたことが、Table 2の年間計画等の再編成と環境整備等であった。休校により年度当初に編成された教育課程の大きな見直しが必要となり、学校再開に向け再編成が行われたといえる。また、感染症対策をした学校の再開に向け、様々な環境の整備にも取り組まれていたことが分かる。「在宅勤務ではありませんが、ほとんど毎日出勤しました」との記述もあり、学校再開に向け教員は多くの時間を割いたと考えられる。さらに、オンラインに関する研修が自治体等で開催されていることがTable 3から分かる。今後の教育活動を予測することが難しい中、児童生徒の学びを止めないための柔軟な対応が教員には求められ、様々な研修が実施されているといえる。また、ミドルリーダーとして活躍している修了生からは、「教員への支援」も挙げられていた。休校中に不安を感じているのは児童生徒だけではない。不安を感じていた教員への支援をする等、学校内で教員同士が支え合っていたと考えられる。

次に、行政職員の回答についてまとめる。

目立つ回答はテレビやオンラインを介した動画の配信である。教員の回答によると、学校が独自に動画を作成しているケースは、Table 1の「動画作成・配信」10件のうち3件と少ない。教育委員会等が作成した動画を学校は活用していることが多い。また、研修日程等の再調整やそれに伴う通知文書の作成、臨時会議の開催等、コロナ禍における業務は多岐に渡っている。それに加え通常業務も行っているとの記述もみられた。

ここまで、回答を教員と行政職員に分けてまとめたが、教育委員会は学校を導き支え、学校は教員が支え合い協働し、児童生徒の「学びの保障」のために様々な取組を実施し、休校期間を乗り切ったといえる。さらに、休校期間に周到な準備を行った

ことで、休校期間が終了し再開した学校において、コロナ禍に適応した教育活動が展開されたことが予測できる。

3. 休校期間中に感じたこと、考えたこと

回答の内容をもとにコーディングを行った。付与されたコードとコードごとに分類された回答内容の概要をTable 4に示す。

Table 4 休校期間中に感じたこと、考えたことの内容分類

コード	回答内容の概要
児童生徒	児童生徒への思い
保護者	保護者対応、保護者とのコミュニケーション
教職員	教職員の同僚性、協働、学び合い
学校	学校の役割、学校の存在意義
コロナ対応	学校のコロナ対策、教室でのコロナ対応
学校再開	学校再開後に向けた準備
働き方改革	仕事への向き合い方、業務外の時間の使い方
学習	児童生徒への課題の質・量、与え方、回収方法、児童生徒への学習支援
生活	休校期間中の児童生徒の生活の様子、乱れ
ICT	学校のICT対応、家庭のオンライン環境、オンラインによる学習支援
自分自身	自分自身の在り方、これまでを見つめ直す機会
仕事の意義	行政職としての在り方、教職の意義
当たり前の再考	これまでの授業の見直し、対面の価値の再考、教育課程の見直し、人と人とのつながりの重要性
学びの再考	学ぶことの意義、今後の授業の在り方、コロナ禍での学びの在り方

付与されたコードは14で、大別すると、①人（修了生自身が向き合っている児童生徒や保護者、教職員等）、②学校（学校の意義、学校のコロナ対策、学校再開後に向けた準備、働き方改革等）、③児童生徒の学習・生活（休校期間中の学習支援、課題、生活リズム等）、④ICT（学校のICT対応、家庭のオンライン環境等）、⑤自分自身や仕事（自分自身の在り方、仕事の意義等）、⑥深い省察（当たり前の見直し、学ぶことの意義、これからの学び等）の6つとなり、非常に多くのことについて思案されていることが分かる。

次に、修了生の属性によって、回答内容に違いがあるのか、教職大学院に学部卒で入学して学んだ学

部卒院生と、現職派遣で入学して学んだ現職院生との回答内容の比較を試みる。それぞれがどのコードについて言及したかを比較した結果をTable 5に示す。なお、調査に協力した34名のうち、学部卒院生は7名、現職院生は27名であった。

Table 5 学部卒修了生と現職修了生の回答の比較

コード	回答者	現職		
	学部卒	学校勤務	学校勤務	行政勤務
児童生徒	2	7		0
保護者	1	2		1
教職員	0	5		1
学校	0	6		2
コロナ対応	2	3		1
学校再開	2	2		0
働き方改革	0	2		0
学習	1	7		0
生活	1	1		0
ICT	1	3		2
自分自身	1	3		0
仕事の意義	0	0		2
当たり前の再考	0	5		2
学びの再考	0	1		4

学部卒院生の修了生は、教員としての勤務経験が少ないこともあり、目の前にしている児童生徒や保護者について、日々取り組んでいるコロナ対応、学校再開に向けての準備や教材研究等について回答している一方、現職院生の修了生は、それらに加え、教職員の連携や協働について、学校が担うべき役割、学校の存在意義等についても言及しており、コロナ禍にあっても、広い視野をもって俯瞰的に物事を見つめていることが分かる。また、これまで当たり前に取り組んできたことについても改めて再考し、対面での関わりの意義・よさを見つめ直したり、コロナ終息後の授業の在り方についても考えたりする等、中長期的な視点からも考えを深めていた。

現職院生の修了生の中には、修了後に教育委員会の指導主事等として勤務をする者も多い。行政に勤務する修了生の回答の大きな特徴としては、教育や学びの在り方について大局的・俯瞰的に見つめていることである。コロナの影響を受けた学校や教職員への支援を行いつつ、これまでの学校、授業の在り方を改めて見つめ直したり、学ぶことの意義について深く考えたりしていることが分かる。また、直接ICTを活用した授業を行うことはないにもかかわらず、ICTについての言及も見られた。コロナ禍での

児童生徒の学びを支えるため、ICTの活用が強く求められる環境になったことや、GIGAスクール構想を受けて各学校のWi-Fi環境の整備やタブレット端末の配備を推進したり、それらが活用される授業を参観、指導したりする機会が増えたこと等が要因となっているのではないだろうか。

学部卒院生の修了生は、目の前にしている児童生徒の学びを保証したり、休校中の生活について案じたり、保護者との連絡・相談等、コミュニケーションを大事にしたりすることに注力している様子が見て取れる。担当している校務分掌等も、経験豊かな現職院生の修了生と比較すれば少ないこともあり、学校全体を見渡す視点で考えるにくいことは理解できる。それでもなお、置かれた立場でできうることとして、宇大教職大学院で養われた「授業力」、「個への対応力」を発揮し、奮闘していることが分かる。

一方、現職院生の修了生は、上記の2つの力に加え、「学校改革力」に関わることにについても幅広く、そして深く考えていることが分かる。回答内容を詳細に見ていくと、学習指導主任として休校中の課題やオンライン授業について管理職と何度も議論し、児童生徒の学びを保証するために学校の中核として活躍している様子や、休校中の時間を活用し、若手教員と協働で教材研究を充実させたり、ミドルリーダーとしてコロナ禍での管理職の様子を観察し、教職員のケアに努める姿勢から学んだりする様子が読み取れた。学部卒、現職、双方がコロナ禍においても、教職大学院での学びを生かし、置かれた立場でできうことに専心している様子が見られた。

4. 休校および新しい生活様式による学校再開において生かされた教職大学院での学び

まず、「学校改革力」について言及されたものを挙げていく。ある修了生（現職院生・小学校）は、「休講中の課題や学校再開後の強化の授業の進め方など先生方の意向を聞き、まとめなければならないことがいくつかあった。必要に応じて学校としての動きを決めたり、学年裁量で進めてもらったりした。」と振り返る。そして「チームとして動いていく」ことの意義や意味を念頭に勤務をしていたという。さらに他の修了生（現職院生・小学校）は、「これまでに経験しなかったこと、新しいことを始めることが多くなるので、より一層同僚性が求められると思います。」と学校現場における「同僚性」の重要

性を指摘している。他の修了生の回答においても直接的あるいは間接的に「チーム」や「同僚性」というキーワードが散見された。また他の修了生（現職院生・小学校）は、「職員室の居心地がよくなるように、せっかくの休校を無駄にしないように、ミドルリーダーを中心に動いた。」と回答している。若手と管理職をつなぐミドルリーダーの果たすべき役割を自分事として引き受け、行動できていたことがうかがえる。「学校改革力」に関して、他方では以下のような回答も見られた。修了生（学卒院生・中学校）は「Googleを活用したアンケート調査や学習課題の支援を提案したが、うまく伝えられなかった。」と提案を行ったが、その結果は不調に終わったことを報告している。しかし、この結果に甘んじることなく「生徒のためを第一として、可能な支援をこれから考えたい。」ということばで、この学卒院生は回答を締めている。若手教員として、学校の組織文化に積極的にに関わり、必要に応じて改革しようという意識をもって勤務していることがわかる。

次に、「授業力」について回答されたものをまとめていく。ある修了生（現職院生・中学校）は「ペアやグループ活動がやりにくく、なかなか理想的な学びはできていないが、その分一人一人に目を向けて授業を行っている。振り返りの時間を確保し、毎時間集めて時事に生かせるようにしている。」と回答している。また、他の修了生（現職院生・小学校）は「学び合いが難しい中でも、なんとか子どもたちどうしの学び合いの機会を作り出したいと考えていること」と答えている。このようにコロナ禍において感染症予防のために様々な制約がある中でも、子どもたちの学びの質を保障しようと積極的な試みをしていることが明らかになった。子どもたちの学びの姿を積極的に捉えようとする姿勢は、ある修了生（学卒院生・中学校）の「グループ活動でなくても、生徒の学ぶ姿を見とることができるのだと感じた。」という回答にも現れているといえよう。

修了生は、新学習指導要領の総則に記述されているような「主体的・対話的で深い学び」を目指し、児童生徒対話を重視した授業実践について学んでいる。そして、このことを基盤に「新しい生活様式」に対応した授業実践を試みていることがうかがえた。

次に、「個への対応力」についてまとめていきたい。

ある修了生（現職院生・小学校）は「児童同士の密を避けるため、一斉指導型の授業を多く行っている現状があるとしながら、「その中で、子どもたち一人一人の学びをどのように掴んで、学びの連続性を保障していけばよいのかを、教職大学院で学んだことを振り返り、生かしながら日々考えています。」としている。前述の「授業力」とも関連が見られるが、感染症予防のために様々な制約がある中でも個を見取る力の大切さを実感して勤務している様子うかがえる。同様に他の修了生（現職院生・小学校）は、休校、学校再開と教師も保護者も落ち着かない中、少なからず不安を抱える子どもたちがいたことを踏まえ、「改めて『子どもを見る』ことの大切さを実感した」と述べている。さらに学力向上推進リーダーとして、子どもたちの姿を積極的に他の教職員にフォードバックすることを心がけたという。さらに他の修了生（現職院生・行政）も『『子供の学びを真ん中に考える』』ということは、どんな状況になってもぶれない。」と強く思ったと回答している。多くの修了生の回答から、未曾有の状況下だからこそ、子どもひとりひとりの「個」に着目することの重要性を実感していたことがうかがえる。

最後に、多くの修了生が、教育の本質を考えたり、事象を俯瞰的に見たりすることの重要性を強く意識したという回答を寄せている。例えばある修了生（現職院生・行政）は、学校現場におけるICT活用などに携わりながらも「どのような環境の変化でも一喜一憂せず、教育の本質を考えていくとの大切さも生かされている」と回答している。また他の修了生（現職院生・行政）も「学校とは、学びとは、教育とはなどと深く考えたことで、このような不足の事態の中でも比較的落ち着いて自分の考えを持てたと思います。」と答えている。そして他の修了生（現職院生・小学校）は「氾濫する情報に振り回されず、目の前の事実を見極めたり、一次情報など確かな事実にアクセスする努力をしたりしつつ、批判的思考を働かせること」の重要性を感じたと述べている。教職大学院における上記のような思索が、学校現場や教育行政の現場における実践において指針となっていることがうかがえる。

令和3年4月1日 受理

The impact of temporary school closures on teachers
taking measures to combat the new coronavirus infections:
From a questionnaire to graduates of the graduate school
of teacher education

Kiyomi SHIJO, Tsugiko OZAKI, Takamitsu TAMURA, Yoshiyuki ONOSE
and Yoshiki WAINAI